

『パラグアイ移住者次世代に向けて:セントロ日系の取り組み』

【 序文 】

第1回『地球の裏側の日本』の中で、パラグアイ移住日本人の資産の一つとして、アスンシオン郊外に広大な総合保養施設があることを紹介しました。

パラグアイでは6移住地と3都市に共同体組織「日本人会」があり、それぞれが集会場、日本語学校、グラウンド、診療所などの施設を持ち、移住者と地域住民融合の拠点になっています。しかし冒頭に紹介した施設はそれらとは別に首都アスンシオンから約 50 キロ離れたイタグア市にあり、素晴らしい緑に囲まれた 24 ヘクタール(東京ドーム5個分)にも及ぶ広大な敷地に広がっています。



(写真: セントロ日系本部ビル正面玄関)

これが当館 HP『日本ゆかりの写真集(14-1)』でも紹介している総合文化スポーツ施設「パラグアイ・セントロ日系本部」で、運動公園、グラウンドやプールといった運動施設に加えて宿泊施設、集会場、診療所も備わり教育事業やレクリエーションなど各種のイベントの場として大きな役割を担っています。

この「パラグアイ・セントロ日系」は1987年に移住二世を中心とする若いグループの集いの場として、また世界各地で暮らす他国の日系人との交流を目的として創立されました。その時代のパラグアイ日本人社会は戦後移住開始からまだ 30 年弱、ゼロから移住社会を築いてきた第一世代が第一線で活躍する中で、当時の若手世代が将来のパラグアイ日系社会を見据え、次世代の育成をも念頭に置いて始めたのが「セントロ日系」活動です。



(写真:本部棟の全景)



(写真:日本通りの標識と本部の掲示)

パラグアイの春は、樹木ラパッチョの3種類(ピンク、白、黄色)の美しい花が街路や公園に咲き乱れますが、セントロ日系の広大な敷地にも多くのラパッチョの木が植わっています。ピンクや白の花は満開の桜を、黄色の花は秋の銀杏並木を連想させ、それらが緑に包まれた素晴らしい環境に佇んでいます。そして、そこには移住者次世代の将来に向けた思いも詰まっています。

正門前を通る道路の名はずばり“Avenida Japón(日本通り)”であり、季節のバザーなどでは近隣のパラグアイ人も参加して大変な賑わいぶり。今ではすっかり地域に馴染んだ存在です。



(写真:セントロ日系本部敷地の黄色のラパッチョと市内に咲き乱れるピンクのラパッチョ)

今回の『パラグアイ便り』では、この「セントロ日系」会の創設から長く運営にあたってこられた田中裕一氏(アスンシオン在住で保険会社経営)に、この施設に込められた思いと活動の軌跡を綴っていただきました。

(上田善久 2015年1月)